

## 「アチェの分離主義(1)」(2021年04月23日)

サビリラ戦争

ムジャヒディンは戦う宗教軍

聖戦におけるシャヒツの死には

アッラーが天女を授ける

アチェ人は子供のころから、戦場における戦士になることを教えられてきた。アッラーが定めた道を歩むことをサビリラ *sabilillah* と言う。神の道を歩む者がフィサビリラなのである。アッラーの道を全うするための戦争が神の道の戦いであり、サビル *sabil* が道を意味しているので、アチェ人は神の道の戦いを *perang sabil* とも呼んだ。武力謀略をもって支配しようとのしかかってきた異教徒 (*kafir*、アチェ語で *kaphe*) を打ち払うことがアチェ人の眼前に出現したサビル戦争だった。

冒頭の四行はサビル戦争物語 *Hikayat Perang Sabil* の一節だ。サビル戦争物語は1710年にシャイツ・イブン・ムサの書いた著作から取られたものと言われているが、1834年にシャイツ・アブドゥル・アルサマツが著した作品から1894年にトウンク・アツマツ・チョツ・パルエが改作したという説もある。

かつて、アチェ人の大人はだれもがサビル戦争物語を暗唱した。みんなが声をそろえて唱えると、死の恐怖は消え失せて、死地に赴く興奮が心身を包んだ。サビル戦争物語はアチェ人の心にジハードの歓喜を掻き立てることができた。そのために、最新兵器を装備した侵略軍さえアチェ人を容易に屈服させることができなかったのである。

圧制支配に反抗する戦争は老若男女から子供に至るまで、ムスリム全員にとっての義務であることをサビル戦争物語は説いている。そのためにオランダ植民地政庁が起こしたアチェ戦争の中で、頻りに女子供が戦闘に加わって生命を落とした。どうしてそのような総力戦を物語の作者は鼓吹したのか。

オランダが起こしたアチェ戦争がアチェ人にとってのサビル戦争だったという印象が強いので

は、サビル戦争物語が盛んに語られたのがその時期であったということ、またアチェスルタン国が勃興して以来はじめての全国土防衛戦であったために民衆総力戦の意識を呼び覚ますのが容易であったこと、などがあげられるだろう。そのあたりの様相と背景はなんとなく、大日本帝国末期の民族総力戦にオーバーラップしてくる。

圧倒的な優位にある兵器を装備した強力な外敵をアチェは常に相手にしなければならなかった。東南アジア一帯で最大の商港だったマラッカを奪取してマラッカ海峡を独占したポルトガル人がスマトラへ通商・布教・イスラム打倒の矛先を向けるようになる時期に、スルタン・アラッアディン・リアヤツ・アルカハル Ala'addin Riayat al Kahar(在位1539～1571年)はオスマントルコに使節を送ってヨーロッパ人の侵略に対抗するイスラム側の状況認識と見解の統一をはかっている。そのとき、相互に軍事支援を行う協定が結ばれた。

それがアチェのアラブ世界への外交の草分けだったとする見解もあるが、国際政治外交という面でのものという捉え方がなされるべきだろう。メッカを統治する行政機構との接触がそれ以前にまるでなかったはずもあるまい。

その結果、オスマントルコはアチェへの軍事支援のひとつとして駐留軍をアチェに派遣し、新型砲を持つその部隊はアチェ軍に加わって土着化した。現代アチェ人の中に紛れもなく、トルコ人の遺伝子を持つ者が混じっている。[ 続く ]

## 「アチェの分離主義(2)」(2021年04月26日)

1819年にアチェはイギリスとマラッカ海峡の安全保障に関する条約を結んだ。フランス領(旧蘭領)東インドを握ったイギリスにとってオランダに服属していなかったアチェが攻守同盟を求めて来たのだから、決して悪い話ではない。ただ、その時、旧蘭領東インドをイギリス政府が新興同盟国になったオランダ王国に全面返還することになろうとは、イギリス人の多くも想定していなかった印象が濃い。

ともあれ、その条約の結果だろうか、ヌサンタラの大部分がオランダ王国植民地として再出発したあと、オランダとイギリスは相互にアチェに対する不可侵を合意した。それが20世紀になるまで、アチェをしてヌサンタラで数少ない名実共の独立国の地位を保たせた一要因である。「インドネシア＝350年間のオランダ植民地」説を否定する論拠のひとつがそのアチェのたどった歴史である。巷にあるその説はどうも被害者が被害を誇大に言い立てる傾向が生んだものであるように思われる。

しかしオランダは1873年にアチェへの軍事侵略を行った。イギリスとアチェの攻守同盟は破棄されていなかったから、条約の紙に書かれた言葉だけを順守するなら、イギリスはアチェ防衛のために参戦しなければならないはずだ。しかしこの世界が正直者の形式主義者によって動かされているのではないことを、人類史の中に散りばめられた太古からのエピソードの山なす先例通りのことがまた行われたのを、われわれはふたたび実見することになった。

だが一方、オスマントルコはオランダの非を、言葉を尽くして打ち鳴らした。トルコのマスメディアはオランダの悪逆無道を全世界に言いふらしたのである。ただ残念なことに、オランダが住んでいるコミュニティであるヨーロッパ世界で、トルコ人の批判はあまり真剣に取り上げられなかったようだ。侵略的だったその時代の空気というものも、もちろんある。誕生してから一切が崩壊するまでの間に大日本帝国があのようなことを行ったのも、その空気の下だったのだ。

オランダももちろん、イギリスとの衝突など望むはずがない。オランダはアチェ征服の準備のひとつとして、全スマトラ島のオランダ併合をイギリスに承認させることを忘れなかった。その協定は1871年に結ばれている。

アチェ征服の前哨戦は、アチェの海賊に対する規制という謳い文句によるオランダ海軍の海上封鎖から始まった。アチェのスルタンは状況を有利に導こうと考えてシンガポールに使節を派遣した。使節は米国・フランス・トルコの領事を訪問してオランダの行動に対抗し得る共同戦線の構築をこころみたものの、結果はアチェの孤立無援が証明されたただけだった。

満を持したオランダ植民地軍のアチェ進攻が1873年3月26日に開始された。3千人の兵力を投入したその第一次進攻は、しかし失敗に終わった。その年11月、1万3千人を動員した第二次進攻が実施されたが、アチェは屈服しなかった。

オランダ植民地政庁とアチェ人の戦争は全部で4回繰り返された。第一幕は1873年、第二幕1874～1880年、第三幕1884～1896年、第四幕1898～1942年。それが完結したのは、日本軍がオランダ人を追い払い、捕虜収容所に入れ、オランダ植民地軍を解散させたからだ。[ 続く ]

### 「アチェの分離主義(3)」(2021年04月27日)

1876年1月、植民地軍はアチェスルタン国の王都クタラジャを激戦の末に占領した。双方に数千人の死者が出た。スルタン宮殿にオランダ国旗がひるがえったものの、スルタンは降伏しなかった。オランダ側にとっては大変な予想違いだったようだ。その後何年も軍事作戦を続けたというのに、王都の外に占領地を広げることは遅々としてはかどらなかった。結局、植民地政庁は王都を確保したことを根拠にして、戦争は終結しアチェはオランダに服属したとの終戦宣言を出したが、それは戦費が枯渇してしまったことや外交面での見栄などが複雑にからみあったオランダ側の一人芝居でしかなく、アチェ人にとってサビル戦争は少しも終わってなどいなかったのである。



死を恐れずに勇猛果敢に敵の攻撃に向かって行くアチェ人の姿は、ディポヌゴロ軍、あるいはパドリ軍、でなければバリ人部隊やボネの騎馬兵団のようなものではない。だが自信に満ちあふれ、運命に敢然と立ち向かい、自分の土地の主権を維持しようと武器を手にして襲い掛かるアチェ人は、ゲリラになるために生まれて来たような人種であった。1895年に発表された書物「東インド戦争史」の著者でアチェ戦争に従軍した体験を持つホイヤー歩兵大佐はアチェ人の姿をそのように描いた。



Christiaan Snouck Hurgronje

ゲリラ戦の泥沼に落ち込んだオランダ植民地政庁がその状況を打開するための頼みの綱にしたのは、東洋文化学者でオランダ政庁住民統治顧問の職に就いたスヌーク・フルフロニエ Christiaan Snouck Hurgronje の知恵だった。スヌークはそのためアチェ社会に入り込んで実態調査を行うことにし、それを果たしたかれが政庁上層部に上げた提言を基に組み立てられた戦略がアチェ統治者とその正規軍の壊滅を実現させた。

オランダ人スヌーク・フルフロニエはレイデン大学で神学を学ぶうちにイスラム神学に興味を抱いてアラブ語を修得し、数年間アラブの地に滞在してハジの称号を得、稀有のヨーロッパ人のひとりになった。レイデン大学で教鞭を取っていたかれは1889年にオランダ東インド政庁の顧問になり、東インドに移住する。

アチェ戦争で苦渋をなめていた植民地政庁はスヌークに期待をかけた。本人はアチェに一定期間滞在して現地調査を行うことを希望したものの、それはうまくはかどらなかった。その間、かれは1890年に西ジャワ州チアミス Ciamis の原住民貴族の娘を妻にしてムスリム家庭を築いた。最終的にかれは、1891年7月8日から1892年5月23日までアチェに滞在してハジ・アブドゥル・ガファルを名乗り、アチェのイスラム界指導層と交わった。併せて、アチェ社会の実体を見極めるために、さまざまな見聞をした。

バタヴィアに戻ったスヌークは大論文「アチェレポート」を書き上げて政庁に提示した。その中でかれは、ローラー型の力攻めでアチェ征服を行うべきでなく、スルタンの動きは宗教指導層の指示に服す傾向があり、宗教指導層の中の政治寄り路線を好む好戦的反ヨーロッパ的強硬派に対する徹底的な力の誇示によってかれらの思い上がりを突き崩す方法がアチェを服属させる面での上策であると提言している。しかし政庁は学者の希望を採り上げるのでなく、その報告書を骨子にする戦略を構築して強硬姿勢を続けたのだ。

1903年に最期のスルタンであるムハンマツ・ダウツ・シャツがオランダ植民地軍に捕らえられてバタヴィアに連行され、アチェスルタン国は栄光の幕を閉じた。だが統治支配者の空白によってすら、アチェ戦争が終了することにならなかった。統治支配者が持った正規軍が支離滅裂になってしまっても、フィサビリラ戦士たちは後から後から出現したのである。スヌークには

その帰結が見えていたのかもしれない。[ 続く ]

## 「アチェの分離主義(4)」(2021年04月28日)

スヌーク・フルフロニエは生涯で4回結婚した。最初はジェッダに滞在中にアラブ女性と結婚し、二度目がチアミスの貴族の娘、サンカナ。その妻が5人目の子供を流産して母体と胎児が共に死亡したため、数年後にバンドンの代理プンフルの娘シティ・サディアをかれは妻にした。1906年に東インドを去ってオランダに戻ったかれは、1910年にオランダのズッフェンで牧師の娘イダ・マリアを四度目の妻にしている。

スヌークが本当にムスリムだったのかどうか、という疑問が語られることがある。1884年にジェッダを訪れる前に、かれは真のイスラム教徒であることを証明するための審問をアラブ側から受けた。それに通過したかれはアラブに居住し、1885年に非ムスリム禁制の地であるメッカを訪れてハジの称号を得ている。ところが1886年にかれがレイデン大学の友人に宛てて書いた手紙の中に、自分はムスリムであるふりをしているだけだ、という文が書かれているのが見つかった。その手紙は現在、ハイデルベルク大学図書館にある。

しかしアラブ滞在中も東インドでの十数年間も、かれはムスリムとして日々の暮らしを営んだのである。ウンマーと呼ばれる生活共同体の中でのしきたりさえ守っていれば、帰依だの信仰だのという精神的価値とは関係なく、その人間がムスリムとして認知されるのは事実だ。

ムスリムの家庭に生まれ、ムスリムのライフスタイルをしつけられ、しかしアッラーについての話のほとんどはよく理解できないというムスリムであっても、ムスリムを自任してウンマーにおける定められた行為行動を行っているかぎり、かれは正真正銘のムスリムなのであり、後ろ指をさされることは絶対はない。インドネシアのプリブミ(イスラム)社会の中に入ってみれば、それが事実であることを至る所で見聞するだろう。

一日5回の礼拝を神と対面するために行っているムスリムがどれだけいるのか、それをしつけられた社会善と習慣の実践として行っているだけのムスリムがどれほどいるのか。ウンマーはまず生活共同体として存在しているのであって、宗教家や神学者が集まって作った共同体

ではないのである。共同体構成員の資質は千差万別で、アッラーの存在を雰囲気の中に感じ取ってはいても、神学的な話はまるで理解の外であるという人間がいておかしいことはまったくない。ウンマーとは宗教オリエンテーションを持たされた単なる地縁コミュニティ以外のなにものでもないと言えれば言い過ぎになるだろうか？

ムスリムの家庭に生まれて単に社会生活におけるイスラム式ライフスタイルを実践しているだけの折り紙付きムスリムと、ムスリムとして暮らした時期のスヌークとを比べて見るなら、その両者の間に違いがあるとは思えない。

インドネシア共和国が独立を宣言したとき、植民地支配者との長期にわたる戦争で疲れ切っていたアチェ人が喜ばなかったはずがない。もちろん植民地支配者とのゲリラ闘争は日本軍がオランダを追い払ったから、その間休止状態にあったのも確かだ。

日本軍の対アチェ工作はそのポイントをつかんで行われたため、日本軍のアチェ進攻はきわめてスムーズに進展した。だがしかし、だからアチェ人は親日であるなどと誤解してはいけない。日本軍政が旧スルタン国統治機構の中間支配層を郡長・村長に据えたことが日本軍政に対する民衆の不満と反感を高めることになり、流血の対日反抗事件すら発生したのである。

親日・反日などというレッテル貼りはものの見方を誤らせるだけだ。おまけに観念論でアチェ人を金太郎飴の一枚岩だと見なしては、人間の姿を見失う落とし穴に落ちるだろう。アチェ人自身の分裂抗争もその時期に水面下で進展した。日本軍政期に対日反乱事件が起こったのもその根から生じた枝葉の部分であり、共和国独立後にさえ両派が互いに殺し合いを演じている。[ 続く ]

## 「アチェの分離主義(5)」(2021年04月29日)

アチェスルタン国の歴史の中で組み立てられてきた地域統治行政システムであるウレバラン Uleebalang 制度は地域首長を小王にした。ウレバランとは小王として領民に君臨した地域首長を指している。ウレバランはスルタンに任命され、スルタンに貢納し、スルタン軍の一部を

構成する義務を負う。つまりウレバランとはスルタンの武将であって、知行地を与えられてその土地の領主になるという形式にたいへんよく似たシステムがこのウレバラン制度だ。ウレバランはトウク Teuku という称号で呼ばれた。それは男性の場合であり、女性ウレバランはチュッ Cut がその称号だった。

ファナティックなイスラム社会でありながら、アチェには女性指導者が輩出した歴史がある。アチェの統治者が経済覇権を掌中にしている大商人たちに頭を抑えられていた時期、代々のスルタンは絶対王権を確立させることに努めて来た。富裕な大商人の中でランカヨ (rangkayo=orang kaya) という称号を与えられた者たちが、かれら自身の蓄財に便宜を与える国策を王宮の中で方向付けているかぎり、スルタンが絶対王権を手にはすることはありえない。ランカヨとは富裕な大商人に関する一般名詞でなくて、スルタンへの発言権や王宮内での国事決定に参与する権限を認められた富裕者の称号である。



Sultan Iskandar Muda

英傑スルタン・イスカンドル・ムダが出現して絶対王政を確立させ、同時にアチェの黄金時代を築いて偉大なる繁栄とスマトラの覇者の地位をアチェにもたらしたあと、自分の男児を処刑してしまっていたイスカンドル・ムダを後継したのは女婿のイスカンドル・タニであった。

イスカンドル・タニが1641年に没すると、王位継承問題でアチェ王宮は大いに揺れた。合意された中道的な最終結論は、イスカンドル・タニの妻であるイスカンドル・ムダの実の娘をスルタンに指名することだった。こうして女性スルタン Sultana のサフィヤッ・アルディン・タジ・アララムが1675年まで王位に就き、その後の三人の女性スルタン時代を开花させた。しかし四代続いたアチェのスルタナ時代は、四人目のカマラッ・シャッ後の1699年に終わりを告げた。

絶対王権の軟化を望むランカヨやウレバランたちが持ち出してきた、女性スルタンはフィキで認められていないという反対論がその結果をもたらしたのである。その造反によってアチェの絶対王権は弱まっていったようだ。とは言っても、アチェがスマトラの覇者の座から転げ落ちるようなことは一度も起こらなかったわけだが。

他に、女性の軍隊司令官もいた。アチェ王宮の親衛隊はすべて女性だったそうだ。その親



衛隊長を務めた女性マラハヤティはアチェ水軍司令官になって男女混合のアチェ水軍を率い、オランダ軍船との戦争を行った。マラハヤティのエピソードは拙作「フェーオーサーVOC」に見ることができる。度欲おぢさんのサイトでどうぞ。

[http://omdoyok.web.fc2.com/Kawan/Kawan-NishiShourou/kawan-40\\_VOC.pdf](http://omdoyok.web.fc2.com/Kawan/Kawan-NishiShourou/kawan-40_VOC.pdf)

話を戻そう。

ウレバランの領内統治の方法は、スルタンにとって重要でない限り放任された。特に19世紀末以降にスルタンの力が弱まり、果てはスルタン位が空白になってオランダ人レシデンがそれにとって代わったあと、ウレバランの専横は甚だしいものになった。アチェの統治行政権を握った植民地政庁は原住民への末端行政に旧来からの制度をそのまま利用したため、ウレバランはオランダ人のバックアップすら得ることになったのである。

そう書くと、すべてのウレバランがオランダべったりになって民衆に苛政を強いたと思う観念論者が出るかもしれないので補足しておこう。スルタン空位後の反オランダゲリラ闘争を指導したのもウレバランたちだったということ。分類ラベルの定義に従って人間に関する判断を行うことは、人間のひとりひとりが異なる存在であるという自然の原理に反していることを忘れてはなるまい。[ 続く ]

## 「アチェの分離主義(6)」(2021年04月30日)

たとえ規模の大小に違いがあっても、非道な専制統治が民衆の暮らしを苦難と悲惨で塗りつぶしているなら、それを許してはおけない立場のひとつが昔からいた。宗教が社会正義を叫んで圧制支配者を非難し、それどころか民衆による為政者への反抗闘争すら指導したこともあったはずだ。宗教が宗教王国を作ろうとしたものまで含めて、そんな時代が世界中の各地にあったのではなかったろうか？宗教が社会性を抜き取られてしまった文化の中に住んでいる人間は、もう一度人類史を読み返す必要があるように思われる。

アチェでは、ウレバランがイスラムの理想とする民衆の暮らしを実現させていないとき、民の

声をスルタンに届かせる役割をウラマが果たしていた。スルタンがそのウレバランを叱責することで、末端庶民の状況は多少とも改善されたにちがいない。

ところがスルタンがいなくなってオランダ人に替わってしまったとき、ウラマのその面における機能が停止した。ウラマ層を反オランダ闘争の扇動者と見なしているオランダ人にウレバランの行政批判をしたところで何も変化は起こらないだろう。オランダ人レシデンにとっては、行政機構が機能することのほうがはるかに重大事なのであり、レシデンがウレバランの肩を持つ傾向はだれもが容易に想像できることだった。

日本軍政も住民統治行政でオランダ人と同じことをした。行政システムの間から末端にかけての行政管理者の地位にウレバランを就けたのである。アチェ人の日本軍政に対する不満はそのときに芽吹いた。軍政が苛斂誅求の度を強めるようになると、対日反乱が防ぎようもなく起こった。

独立共和国政府が指名したアチェレシデン区の初代レシデンは、ナショナリズムの高さで定評のあったウレバラン、トゥク・ニャツ・アリフだった。中央政府のその措置にウラマ層が一斉に反発した。1946年初からウラマの言葉に従う民衆とウレバラン層の間で殺し合いが始まり、ピディ県ではほとんどのウレバランが殺された。それからあまり間を置かず東スマトラの海岸部で、オランダ植民地政府のためにその人形となって働いていたスルタンに始まり、その配下としてそれまで中間から末端に至る封建機構内で民衆を支配していたひとびとに対する肅清が燎原の火のように広がって行った。インドネシア共和国独立が革命の要素を含んでいたことは間違いない。

そんな背景の中での共和国独立宣言は、一方ですさまじいユーフォリアをアチェの地に湧き立たせた。アチェ人が独立インドネシアにどれほど深い期待を抱いたかは、共和国新政府が財政難のために国有航空機を買えないことを知ったアチェの民衆がこぞって金銀装飾品を新政府に寄贈し、おかげでスカルノ政府はスラワ Seulawah と命名されたDC-3を購入することができた一事が証明している。

最初は新政府を全面的にサポートする姿勢を見せていたアチェ民衆が新政府に裏切られた感情を抱いたのは、州制定に際して州域確定がアチェ人の希望を満たさないものになった時だった。アチェが独自の州になることを望んでいたアチェ人は、アチェ・タパヌリ・東スマトラが

一体となって北スマトラ州を形成するという政府決定に苦い思いを抱いた。アチェ人がインドネシア共和国から分離しようという意志を持つ遠因をそれはもたらしたことになる。

この話にはもう少し細かい流れがあって、1949年にアチェは一個の州になり、ダウツ・ブルエが初代州知事に就任した。ところが共和国は1950年にアチェを含む元の北スマトラ州を復活させたことからアチェの中で騒乱が始まり、治安の平静化に苦慮した共和国政府は1956年にアチェを独自の州にし、しかも1959年には宗教面に関する大きい自治権を与えてアチェを特別州にした。[ 続く ]

## 「アチェの分離主義(7)」(2021年05月03日)

ダウツ・ブルエは最初、スカルノを全面的に支持した。自分はスカルノの後に立つのだ、と言って。ところがアチェを独自の州にしない中央政府の方針が明らかになり、その後ついに要請が認められたと思いきや、またまた情勢に翻弄されるありさまを目の当たりにして、ダウツは姿勢を変えた。1953年にかれはアチェのダルルイスラム運動を起こしたのである。それは西ジャワで起こったカルトスウィルヨ Kartosuwirjo のダルルイスラム／インドネシアイスラム軍 DI/TII と提携したアチェ版反政府運動だった。

ジャカルタの中央政府はそれを分離主義と規定し、軍隊を送って鎮圧に努め、9年後にやっとダウツ・ブルエへの説得を行って山間の闘争司令部からかれを社会復帰させることに成功した。ダウツはピディのブルヌンでウラマの暮らしに戻った。

戦争で荒廃したアチェの国土の復興はなかなか進展しないままになっていたが、1970年代に入って世界最大と言われたアルン Arun のガス田が発見されたことで、中央政府は突然アチェに対する関心を強めた。バンダアチェとメダンを結ぶ州間道路は大穴だらけで自動車の進行も難儀する悪路だったものが、あっという間に快適な舗装道路に変身した。昔は550キロ離れたその悪路を二日かけて踏破するのが普通だったのである、

夜は真っ暗だった村々に電灯がともし、中央政府の民生向上プロジェクトもさまざまに動き

出した。工業開発地区に指定されたアチェ北部の開発が進展し、農業がほとんどを占めていた州の産業構造は工業・商業・金融セクターに取って代わられた。そのための資本と人間のほとんどは州外からやってきた。地元文化に沿った事業者選択などということが行われるはずはなかったのである。

長期の戦乱で荒廃の極にあった北アチェ・東アチェ・シグリ各県の村々は、突然目の前で展開されはじめた産業開発を、指をくわえて眺めるだけだった。そこで繰り広げられているモダンなライフスタイルが自分たちの伝統的生活とあまりにもかけ離れたものであり、しかも自分たちの伝統生活の枠組を形成している価値観から外れたものであるためにそこに関わることさえ地元民は躊躇した。これでは、外来者がやってきてアチェの富を奪い去って行くのと変わらないではないか。この国土はアチェ文化を守って来たアチェ人のものではなかったろうか？アチェ人の脳裏をサビル戦争物語がよぎった。

ダウツ・ブルエのダルルイスラム運動から二十年以上が経過して、インドネシア共和国からの分離独立を旗印に掲げた自由アチェ運動 Gerakan Aceh Merdeka が1976年12月にアチェで立ち上がった。発起人のハサン・ディ・ティロは米国留学中の1953年にダウツ・ブルエのダルルイスラム運動に触発されてダルルイスラムの外務大臣を自任し、国外での運動を開始した。その結果、かれはインドネシア国籍をはく奪されている。

米国から戻ってきたハサンが説くアチェ人の主権と誇りを基軸に据えたアチェムルデカ思想は知識人・ウラマそして大衆から支持された。しかしオルバ政権が持った体質は、対話の末に合意点を探すようなものでなく、反抗する者を力で抑えつけるスタイルだったのである。こうしてまた、アチェ戦争の愚が繰り返されることになった。

GAMIはインドネシア共和国からの分離独立を要求して武装蜂起し、ジャカルタ中央政府も軍事力でこの分離主義反乱を鎮圧しようとした。国軍はアチェ州全域に対する強力な軍事行動を行って反乱軍を完全制圧し、80年代末に軍事作戦地区 Daerah Operasi Militer に指定して州全域を軍の管理下に置いた。GAMIの生き残りは他州に散らばって地下活動を続けた。

[ 続く ]

## 「アチェの分離主義(8)」(2021年05月04日)

力による制圧を指示したスハルト政権が滅びると、レフォルマシ政権は1998年にDOM体制を解除して、ハビビ大統領とウィラント国軍総司令官がアチェ州民に対し、DOM体制下に国軍が行った種々の非人道的行為を謝罪した。国軍によるアチェ人への人権蹂躪問題がマスメディアを賑わし、アチェのあちこちで行われた虐殺事件が明るみに出された。

時代の変化の風を受けて、GAMはまたアチェに戻って新政権との対話を再開したものの、話し合いは毎回行き詰まり、アチェの内部でインドネシア共和国からの分離独立を叫ぶ一派が住民投票の声を上げたとたん、中央政府は態度を硬化させた。

数千人の兵隊がやってきてアチェ州内のいたるところにポストを構え、州民の行動を監視し、表だって暴力を振るうことはあまり起こらなかったようだが、政治運動を行う者や学生活動家をかたっぱしから逮捕した。GAMは再び銃を手にするようになる。

DOM時代がぶり返したアチェでは、GAM闘争家の潜伏場所になっている、住民人口の少ない村落部で暮らす非戦闘的住民がDOM時代の大量虐殺の繰り返しをおそれて都市部に移り住んだ。およそ10万人の人口移動が起こったようだ。DOM時代の人権裁判の動きはこの変化によって蒸発してしまい、分離主義という重大国事犯罪の色で塗りつぶされることになった。

DOM時代に国軍と国家警察がアチェ州内で行ったアチェ民衆に対する人権蹂躪行為に対する復讐行動を、今度はGAMがレフォルマシ時代の国軍と国家警察に対して行った。アチェの全域に散開してアチェ人の民生を統御しようとしている国家の軍隊と警察に、GAMは積極的な攻勢に出た。それがアチェの民衆を守るための行動であるという見方によって、民衆はGAMの行動を基本線で支持した。

元々GAMはアチェ州北部の北アチェ・東アチェおよびピディに基盤を置いていたため、州内他県の住民にとってはそれほど親しみを感じるものでなかった。ところがこの時期のGAMの攻勢は州内全域にGAMを出現させる結果をもたらした。つまり、GAM生え抜きでない他県の者の中に、GAMの旗を担いで戦闘行動を始める者が出たということだ。アチェ人にとってのサビル戦争が復活したのである。

この紛争は最終的にフィンランド政府が仲介に入って2005年8月15日にインドネシア政府とGAMの間で和平協定が締結され、長かった武力闘争がやっと終結した

アチェ戦争でスヌーク・フルフロニエが植民地政庁に提言した「抑圧型の圧迫や長引く戦争はアチェ人の反抗姿勢を硬直化させるだけであり、アチェの支配を難しくするばかりだ。アチェ人に丁重で礼節のある姿勢を示し、アチェ人の心をつかむことがアチェの征服によい結果をもたらすことになる。」という言葉が東インド総督と植民地軍上層部は無視して泥沼のゲリラ戦争を招いてしまったが、ジャカルタの共和国政府もその同じ轍を踏んで愚行を繰り返した印象が強い。

アチェ戦争が既に証明したように、力で抑圧しようとするほど、アチェ人は頑なになってそれを拒み、反撃したのである。アチェ人を扱うとき、外面的な形式に意を注ぐとたいして良い結果は得られない。アチェ人の心をつかみ心服させることが一番求められていることなのだ。アチェ戦争もGAM闘争も、まるで双子の兄弟のようではないか、とアチェ人歴史家は述べている。

ヌサンタラの各地がオランダの支配下に落ちたにもかかわらず、19世紀末のアチェ戦争まで、アチェはオランダの支配に屈しない独立国としての立場を維持して来た。アチェ戦争でアチェの正規軍が壊滅し、アチェのスルタンが捕まって降伏文書に署名したことによって植民地政庁はアチェ征服が完結したと思ったが、そうはならなかった。個々に領地を持つ武将たちの抗戦はスルタンが滅んでも続けられたのである。最期のゲリラ闘争指導者が女性英雄チュツ・ニヤツ・ディンであり、かの女は先にゲリラ戦で没したトゥク・ウマルの妻だった。つまり、かれらは武将ウレバランだったのである。[ 続く ]

## 「アチェの分離主義(終)」(2021年05月05日)

チュツ・ニヤツ・ディンはトゥク・ウマルの叔父の娘であり、かの女は夫トゥク・イブラヒム・ラム〜

ガがゲリラ戦で没したあともゲリラ闘争を続けていて、トゥク・ウマルとの共同ゲリラ戦線がそのふたりを結び付けたようだ。そのトゥク・ウマルもオランダ植民地軍に殺され、おまけにチュッ・ニヤツ・ディンは盲目になったが、そんな悪条件さえ、かの女に反オランダ武力闘争をやめさせることはなかった。きっとかの女は典型的なアチェ人女性リーダーの資質を持ったひとりだったのだろう。悲劇の運命を背負った人物だったことは間違いあるまい。

ウレバランの指揮下に行われていたゲリラ闘争はチュッ・ニヤツ・ディンを最期にして潰え去った。だがフィサビリラ戦士たちの武力闘争は日本軍がやってくるまで散発的に続いた。その行動を民衆の中にいる過激派テロリストの単なる暴力行為だと言ってしまうえば、実行者本人たちにとっては、はなはだ不本意なことになるのではあるまいか。

そんな歴史を持つアチェであるなら、オランダ領の色が塗られたヌサンタラの領域が独立共和国になったとき、その中でほんの数十年前までオランダ領になっていなかったわれわれは他種族とは違う、という意識がアチェ人に湧いても不思議はあるまい。実際に、日本軍がやってくるまで植民地軍とのゲリラ闘争を続けていたひとびとはオランダへの服属を認めないからこそ生命をかけて闘争していたのである。

オランダが一方的にアチェを領土だと言い張ったために、共和国主権承認の結果オランダの領土がまるごとインドネシア共和国に移管されたとき、アチェ人の意志と無関係にアチェがそこに引きずり込まれたというのが政治的な流れだとアチェ人の一部は言う。

それは歴史が作り出した虚構であってアチェ民衆が合意したことでなかったのだから、アチェ分離主義問題を見ると、アチェがインドネシア共和国から分離したいという観点から見るのをやめて、時間を1873年の状態に戻したところからこの問題を見るようにしてほしいというのが、アチェ分離主義者と呼ばれているひとびとの意識にあるコンセプトのように思われる。これに似た話はインドやパキスタンでもいろいろと出現したし、いまだに戦闘がぶり返す土地もあるようだ。歴史の虚構を既成事実位置付け、その大前提からの発想として分離主義という言葉を持ち出しているかぎり、アチェ人にとってはオランダ植民地主義者も統一インドネシアを標榜する現代インドネシア政府も同じ穴のむじなにしか見えないかもしれない。

アチェ人は過去の歴史への心的固着が強いとアチェ人自身が語っている。アチェ人は歴史

が好きで、歴史を学ぶことを好み、得た知識を総合していっばしの歴史家になる。ヌサンタラの中で最初にイスラムが土着化したのがアチェの地であり、スルタン・イスカンダル・ムダとアブドゥル・ラウフ・アルシンキリがひとり政治軍事面、もうひとり宗教面で黄金時代を築いた立役者であることを地元民は今でも誇りにしている。それが中央政府への不満に直面したときに民衆をパルチザンにし、権力者への反抗心をますます強める結果をもたらすのである。

たとえスルタン制が独裁的であって民主主義的でないと言われても、国の繁栄と民の豊かさをもたらしたものがそれであるなら、スルタン制のどこが悪いと言うのか。民主主義が善であるのは、それが最大多数者に繁栄と豊かさをもたらすがためであって、そうでない民主主義でも名前が民主主義であれば善だというのは、形式主義者が抱く貧しい価値観だろう。

オルバレジームを指導したスハルト大統領が満面の微笑みで語る「わしの時代は良かっただろうが・・・」のハリカチュアがインドネシアの大衆にいまだに憧憬と郷愁を掻き立てているのが事実であることを忘れてはなるまい。[完]